

令和 2 年度推薦入試最終選考小論文課題

東京大学教養学部教養学科

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面 1 枚のみとする。

本冊子は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1 枚

白紙 1 枚

課題 4 枚

草稿用紙 2 枚

東京大学教養学部

小論文課題 (教養学科)

次の文章を読み、以下の設問に答えなさい。

(一) 傍線部 (一) で述べられているのはどういうことか、具体的にわかりやすく説明しなさい。

(二) 傍線部 (二) をふまえ、「〈内部空間〉と〈外部空間〉の二分法」について、思い浮かぶ自分自身の体験や現代社会の諸事例などを挙げながら、あなたの考えを述べなさい。

ハイデッカーは、『存在と時間』のなかで、現存在としての人間の空間性が示しているのは、距離を取り去ることと方向を定めることの二つの性格であるとして、前者についてこういっている。「現存在が空間的なのは、見まわしによる空間発見という仕方においてであって、つまり現存在はこのように空間に出会う存在するものに対して、つねに距離を無くしながらかかっているのです」(桑本務訳、傍点前田)。ここであらわにされているのは幾何学的な距離ではなく、ミンコフスキーのいう生きられる距離である。私が、私をとりまく空間のなかでゆったりとくつろいでいるとき、私と私が見まわしている周囲のものとのあいだには直接的な接触がないにもかかわらず、「距離」は取り去られている。というより、私と周囲のものは「距離」をこえて、あるいは「距離」に助けられて一つに結びつけられているのである。O・F・ボルノウは、こうした生きられる距離を住いの空間とのかかわりにおいて詳細に論じているが、ボルノウの場合、ハイデッカーのいう「距離を取り去ること」は、自分の身体を拡張することに読みかえられている。「家屋をある観点では拡大された身体とみることができる。そして人間は、同じような仕方で自分を家屋と同一視し、また家屋をとおしてより大きな周囲の空間のなかへ組み入れられているのである。……ここにおいても私が自分をそれと同一視し、それゆえ何らかの意味で私『である』自分自身の空間を、もはや私ではなく、私に帰属しない、そして私には疎遠な別の空間からはっきり識別できるように区別している境界がある。」(『人間と空間』大塚恵一ほか訳 二七六ページ)

私の身体を拡張することで同一化された空間、そしてまた私のものではない空間から区別されている空間——これが密着空間のモデルに対応させることが可能な現実の空間の一つである。しかも、ボルノウがべつのところで、「出発と帰着という運動の二様態は、空間を内側と外側の二つの同心円状の領域に分割する。外側より狭い内側は、住居や故郷の領域であり、人間はそこから広大な領域へと進出して行き、またそこに戻るのである」(同前 七九ページ)といているように、このモデルは、内部空間／外部空間の対構造をもつロトマンの文化空間のモデルとも重ね合わせることができる。というより、ロトマンのモデルは、こうした現象学的な空間をその意味基底として潜在させているのである。私「である」自分自身の空間と私に帰属しない空間との差異は、そのままロトマンのいう「我々」と「彼ら」の対立におきかえることができるだろう。

密着空間のモデルに対応する身体論的な住いの空間の意味するものを的確に描きだしている文学テキストの例

として、つぎに立原道造のソネットをとりあげてみよう。「私のかへつて来るのは」と題された作品である。

私のかへつて来るのは いつもここだ

古ぼけた鉄製のベッドが隅にある

固い木の椅子が三つほど散らばつてゐる

天井の低い 狭く美しい ここだ

ランプよ おまへのために

私の夜は 明るい夜になる そして

湯沸しをうたはせてゐる ちひさい炭火よ

おまへのために 私の部屋は すべてが休息する

——私は けふも 見知らない友を呼びながら

歩き疲れて かへつて来た 街のなかを

私は けふも 疑つてゐた そして激しく渴いてゐた……

窓のない 壁ばかりの部屋だが 優しいが

すつかり容子をかへてくれた……私が歩くと

ここでは 私の歩みのままに 光と影とすら 揺れてまざりあふのだ

「私」が帰ってくる部屋は、「ここ」、つまり「私」の存在が根ざしている場所として意識されている。それは「私」が「街のなか」に出て行く出発点であるにちがいないが、それ以上に「かへつて来る」場所としての意味が重い。天井の低さ、狭く美しい、窓の欠如、といったこの部屋の属性は、「私」の生をあたかく包みこんでくれるかけがえのない場所「ここ」が閉ざされていること、しるしである。三度くりかえされている「ここ」という言葉は、詩句のなかには欠けているものの、「あそこ」ないしは「かしこ」という言葉を一對の組として内包しているはずで、このテキストそのものの構造が、「ここ」をうたった第一、二、四連と「かしこ」をうたった第三連、というように、〈内部空間〉と〈外部空間〉の分節にそくして切りわけられているのだ。

「私」が棲みついている「ここ」は、とくに贅沢な室内装飾が凝らされているわけではなく、どちらかといえば簡素なたたずまいの部屋である。部屋のなかにあつめられた家具も、「古ぼけた鉄製のベッド」「固い木の椅子」というように、ごくありふれたものでしかない。「ランプ」「湯沸し」「炭火」にしても同じことだ。しかし、それらの道具は、「私」が「おまへ」と呼びかけることのできる、親密なものたちである。M・プーバーのいう二つの根原語をかりるならば、「ランプ」や「湯沸し」は、われ—その冷やかな関係ではなく、われ—なんじの関係に向けてひらかれている。この簡素な部屋に集められたさまざまなものは、一つのまとまった秩序をかたちづくっており、その秩序そのものの理由として「私」を指し示しているのである（部屋の隅にあるベッドや床に散らばっている木の椅子から、第二連で紹介される「ランプ」「湯沸し」「炭火」などより小さいが部屋の中心部を構成しているものへと移動する視線の動きは、ごく自然に部屋のなかに集められたものの秩序を了解させる）。

「私」からもへの呼びかけが、ものから「私」への呼びかけとして木魂するといった対話の関係がここにはある。ハイデッガーの言葉どおり、「私」は手許存在としての道具にたいして、「距離を無くしながらかわわっている」。

「私の夜」を明るい夜にかえてくれるのはランプの光であり、湯沸しをたぎらせている「ちひさい炭火」は、「私」がこもっているこの小宇宙の中心である。詩人はそのことを「おまへのために 私の部屋は すべてが休息する」と表現しているが、この「休息」はとりもなおさず、「私」の「ここ」、「私」の生が根ざしている部屋がもっているさまざまな意味の中心なのである。

それではやすらぎを与えてくれる〈内部空間〉にたいして、詩人は〈外部空間〉をどのように扱っているのだろうか。「私」は「見知らない友」との出会いを期待しながら「街のなか」を移動する。街、つまりは都市は本来的に他者との出会いが約束される場なのであり、そこには見知らぬ他者が親しい友にかわる可能性が用意されている。しかし、「私」の手もとに残されたのは疲労と疑惑であって、それだけに出会いを求め「渴き」はいっそう激しいものでなければならぬ。この第三連は、「疑つてゐた」「激しく渴いてゐた」というように、言葉の曖昧さが意識的に増幅されているために、その分だけ第一、二、四連を構成している〈内部空間〉にあつめられたものたちが、確かなイメージとして浮びあがってくる。動詞の世界と名詞の世界の対照である。〈外部空間〉は、「私」の生の確実な拠りどころである〈内部空間〉を象としてきわだたせる地の役割を果しているということもできるだろう。

朝の出勤の途上にあるサラリーマンにとって、オフィスはその日の〈未来〉をはらんだ「かしこ」として前方にひらけている。じっさいにはオフィスの仕事の大半はきまりきったルーティン・ワークであり、そこで過される時間はおおむね退屈な時間であるにちがいないが、それでも未知の人間や予測できない出来事との出会いは、いくばくかの可能性として彼を待ちうけている。そのかぎりでは、立原の詩のなかにある「疑つてゐた」「渴いてゐた」という言葉は、住いから「街のなか」に出発した人間が引きうけなければならない不確定な〈未来〉の私たちを、その裏側から照らしだしていることになる。一日の仕事を終えて家路につくサラリーマンを待っているのは、使いのこされたその日の〈未来〉であるが、それは彼の気分のなかではすでに知られている〈過去〉に顕倒される。オフィスという「かしこ」から住いという「ここ」への帰還は、休息を約束してくれる〈過去〉への回帰なのである。

〈内部空間〉としての住いが〈過去〉の断り口をのぞかせているとするならば、この詩をしめくくる最後の一行、「ここ」では 私の歩みのままに 光と影とすら 揺れてまざりあふのだ」の意味するものもまぎれがない。「私」が歩きまわった昼間の街は、光と影がはっきり分けられている。あるいは影を失なった光だけの世界である。ところが、「私」が帰ってきた「ここ」、住いの世界では光と影がひとつにまざりあう。いうまでもなく、光と影は意識と無意識の暗喩であって、住いのなかに落ちついた「私」は、やがて眠りというまさに無意識そのものの世界に入りこんで行く。住いとしての「ここ」は、「私」の無意識が棲みついている場所であり、「私」は住いのなかの無意識に身をひたすことで、真の休息を手に入れるのである。

よく知られているように、立原は大学で建築学を専攻し、卒業後は短期間ながら建築事務所に勤務して設計の実務に携わったこともある詩人だった。住まうことの意味を文学的に問うばかりでなく、建築空間の問題として思索することができた稀有の人だったのである。シェリングの『芸術哲学』を典拠に現象学の方法を導入しながら独得な建築観を展開した卒業論文『方法論』のなかで、立原は「住み良さ」と「住み心地良さ」という二つの

建築体験を区別している。「住み良さ」は住宅の使い心地、使い勝手がいいという意味で、建築の機能的側面に結びついているが、「住み良さ」を成り立たせている、あるいはそれを深層で支えている「住み心地良さ」は、建築体験のなかでもっとも根元的なものだといえるのである。それは、「建築をつかふ体験」における「生命的本質に根ざした気分情感」であり、もっとも日常的な体験として私たちの日常をつねに取り囲んでいるがゆえに、世界のなかにおける私たちの生のあり方そのものを指し示している。「私のかへつて来るのは」というソネットは、こうした建築空間の認識を詩的なテキストの「内空間」に変換した作品であって、〈内部空間〉と〈外部空間〉の二分法は、詩人の生の構造に対応する暗喩として生かされているのである。

出典 前田愛『都市空間のなかの文学』（一九八二年）

以上

東京大学教養学部

令和2年度推薦入試最終選考小論文課題

東京大学教養学部 国際環境学コース

受験番号 _____ 氏名 _____

本冊子は、指示があるまで開かないこと。

課題開始後、表紙に受験番号、氏名を必ず記入すること。

解答用紙は、両面2枚のみとする。

草稿用紙として、B4用紙2枚を使用してよい。

本冊子、解答用紙、草稿用紙は、終了後に回収する。持ち帰らないこと。

本冊子

表紙 1枚

白紙 1枚

課題 1枚

白紙

小論文課題

(Essay questions)

Write your answers in English.

Question 1: How can economic development and global environmental protection be balanced?

Question 2: Please answer one of the following:

(a) Describe a scientific discovery in the history of science, and elaborate on how it has changed our perception of the world.

(b) Describe a social issue that has recently interested you, and suggest a scientific approach toward resolving the issue.

以上

東京大学教養学部